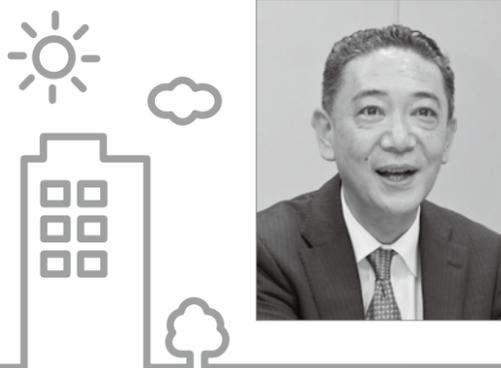


経営資料

No.168 会社訪問

東日本事業
ブロック長 鈴木 康介 氏



聞き手：梅垣喜通（広報委員長）、岡田康弘（事務局長）、取材・撮影・編集：クリエイティブ・レイ株

三浦工業株式会社

会社プロフィール
 代表者：代表取締役 社長執行役員 CEO 宮内 大介
 本社：〒799-2696 愛媛県松山市堀江町7番地
 TEL：089-979-7019 FAX：089-979-7126
 事業所：東京都港区高輪2丁目15-35 三浦高輪ビル2F
 TEL：03-5793-1031 FAX：03-5793-1040
 国内拠点数* 95、海外 216 拠点 ※三浦工業のみ
 設立：1959年(昭和34年)5月1日
 資本金：95億4,400万円
 従業員：単独 3,298名、連結 6,070名
 (海外 1,801名を含む) (正社員・準社員のみ)
 事業内容：小型貫流ボイラ・船用補助ボイラ・排ガス(廃熱)ボイラ・
 水処理機器・食品機器・滅菌器・薬品などの製造販売、
 メンテナンス、環境計量証明業など
 URL：https://www.miuraz.co.jp

Miura 小型貫流ボイラシェア No.1
ボイラ技術を基盤にメディカル分野へ進出、貢献

三浦工業(株)東日本事業ブロック長の鈴木さまにお話を伺います。

まずは御社の主な事業内容をお聞かせください。

弊社の主力製品は、小型貫流ボイラと関連機器の製造販売、メンテナンスまで一貫して手掛けています。

また、貫流ボイラとボイラ技術を基盤とする水処理機器、食品機器、メディカル機器、排ガスボイラなどの機器を組み合わせた「トータルソリューション」をグローバルに提供、メーカー独自のワンストップメンテナンスを展開しています。

三浦工業のボイラの特長は、効率が高く省エネであることです。おかげさまで小型貫流ボイラは業界NO.1のシェアをいただいております。高効率で、お客様のCO₂排出削減に貢献し、低NO_xで環境にやさしい製品を提供することで、お客さまの環境対応にも貢献しております。

製品力も高く、メンテナンスまでお任せできるということですね。

はい。弊社の「技術・生産力」「営業・販売力」「メンテナンス力」これらを一貫したミウラの総合力で、お客様の問題を解決していくことができるのが大きな特長であり、ミウラ独自のビジネスモデルになります。

全国約100ヶ所の拠点に約1,200名のフィールドエンジニアを配属、納入後も安心して機器をお使いいただけるように組織力・機動力に優れたメンテナンス網で保守管理に努めています。

また、1989年よりオンラインによるメンテナンスを行っています。これは今でいうIoTの先駆けです。当時ボイラに各種センサを搭載、電話回線を利用して24時間リアルタイムでボイラ状況を把握できるピフォアメンテナンスを確立しました。これにより稼動状況などのデータに基づいてトラブルが発生する前に、問題を予知して対応することができます。また万が一トラブルが起こった場合に備えて、夜間休日を問わず修理に行ける人員体制を整えています。今では7万台を超えるお客様の機器とオンラインで繋がっています。

海外の拠点などについてもお聞かせください。

現在、海外24の国と地域に展開し、海外でも14万台のボイラ機器が稼動しています。創業者の三浦保のスローガン「世界一安くて良いボイラを作ろう」の実現のため、努力しております。ミウラグループの売上は約1,580億円で、そのうちボイラ等を含む国内機器販売は約660億円。また、海外の売上は23%、中でも中国が最も多く104億円です。

経営資料

ミウラ独自の洗浄・滅菌器



減圧沸騰式洗浄器 RQシリーズ
専用ノズルやラックは不要でセッティング作業時間を大幅削減



世界を変える低温滅菌技術「ETstera」搭載
オゾン過酸化水素混合ガス滅菌器 XZ
過酸化水素の使用量を低減し有害物質の分解・不活化が可能
※ETsteraは三浦工業の登録商標です

ボイラの技術を生かした、メディカル機器や科学機器でも独自製品が多くあり、その関係から科学機器協会へのご入会をいただいたということでした。この点についてお聞かせください。

弊社は、1978年から滅菌器を製造・販売しています。ボイラから出る熱を滅菌に活用する製品を開発してきました。このような形でボイラの技術から派生して、医療分野の他にも食品機器などを製造してきました。現在、滅菌器は業界トップクラスの実績ができました。さらに滅菌器だけでなく洗浄・乾燥する機器まで一連のシステムを三浦工業で提供させていただいており、弊社独自の技術を活用しているのが特長です。

ボイラで有名な三浦工業さまが、こうした分野でもニーズと高いシェアを獲得していることを初めて知る読者もいるかもしれません。具体的な製品をご紹介しますか。

現在イチオシのメディカル製品を2点ご紹介させていただきます。

1つ目は、ミウラ独自の洗浄技術を使った「減圧沸騰式洗浄器」です。これは病院などで取り扱うチューブ状の器具の洗浄に大いに力を発揮します。

病院などには、院内や外来で使った医療器材を回収し、分解して洗浄・滅菌して組み直す中央材料室があります。そこで弊社の滅菌器、洗浄器、乾燥器などが役に立って

いるのですが、皆さんが苦勞されているのが、チューブ状の器材の内部洗浄でした。従来はチューブの内側を洗浄するために、アタッチメントに挿す必要があり、その手間が掛かることと、アタッチメントとの接合面は汚れが落ちにくいこと、また洗える本数も限られていました。

この現場の悩みを何とか解決しようと、ミウラ独自の減圧沸騰の技術を使った洗浄器を開発しました。2010年から販売し、大変ご好評をいただいています。優れている点は、先ほど話したチューブ状の器材の洗浄で、アタッチメント不要、洗濯機のような感覚で洗浄槽にチューブを入れて、蓋を閉めてスタートボタンを押していただくだけです。これでチューブの表側・内側も洗浄できる画期的な洗浄器です。

もう1つは、過酸化水素にオゾンを追加する「促進酸化」の技術を利用した低温の滅菌装置です。低温下でエンドキシンの不活化が確認できた画期的な製品です。

従来、非耐熱性の器材の滅菌には酸化エチレンガスやプラズマなどを使い、良いところ悪いところをお客様が使い分けながら運用されていました。そのような中で、弊社にしかない技術を製品化できないかということで開発したものです。

製品の一番大きい点は、エンドキシンの不活化を確認できたことです。エンドキシンとは「内毒素」と呼ばれることもあるもので、滅菌したあとも細菌の死骸に残り、悪さをす

経営資料

るというものです。エンドトキシンが残ってしまうと、例えばインプラント手術の後などでは、原因不明で発熱するなど予期せぬ事故が起きると言われています。これまで、その除去は250℃での乾熱滅菌という加熱処理でしかできなかったものが、初めて約50℃の低温で99.9%の不活化処理ができるようになったのが弊社の混合ガス滅菌装置です。

特長的なのは、過酸化水素にオゾンを追加して酸化作用を促進させる技術です。この技術によって細菌やウイルスなどの有機物や微生物を効率的に分解・不活化します。過酸化水素やオゾンを単独で使用する場合と比べて細菌・ウイルスに対して非常に高い反応性を持ち、従来の過酸化水素単独での滅菌に比べると少ない過酸化水素の量で滅菌でき、コストを最大で1/3まで(約70%)減らすことが可能です。

また、滅菌剤は基本的に人体には良くないのですが、少ない量の過酸化水素で滅菌ができるため、現場で作業される方も滅菌を必要とする器材にもダメージが少なく済むのです。

これは医療現場、研究現場でもニーズが高そうですね。

はい。例えば、体内に埋め込む器材の様に、エンドキシンの管理規定値が求められているものを扱うお客様で、以前はエンドキシンを不活化しようとすると、かなり大変なプラントを使わないといけなかったという方が、こちらを導入いただくことで不活化処理ができ、エンドキシンプリーのもので作れるようになったということでした。

そうした体に埋め込むものや、不妊治療、再生医療など特に日本が力を入れようとしている分野でお役に立つものだと思います。お客様のニーズに応え、先ほどの滅菌沸騰と合わせてミウラ独自の技術で、医療やアカデミア、製薬メーカーにオンリーワンの製品として提供できる機器を増やしたいと思っています。

御社の創業の経緯などをお聞かせください。

創業者の三浦保は、最初は麦を製粉する精麦機を製造していました。精麦の過程で麦を蒸す際、蒸気ボイラが必要になったのですが、当時はボイラ製造者が少なく、創業者は自分で作ろうと決心して開発を始め、1959年に愛媛県松山市に株式会社三浦製作所を設立しました。

この年にちょうど法改正があり、圧力が10キロ以下、伝

熱面積が10平米以下は小型貫流ボイラということで、無免許無検査とされました。そうして試行錯誤の末、新しい発想のボイラを完成させたのですが思わぬ関門があり、愛媛労働基準局がそのボイラを認めてくれなかったのです。三浦保は何度も通って安全性を説得したものの認めてくれないので、東京の労働省に直談判に行きました。交通網も整っていない中、愛媛県から東京まで何度も通い、最終的には認可を受けることができました。これが三浦工業のスタートです。

鈴木さまは、創業者とお会いしたことはありませんか。

三浦保は、私が入社した翌年に亡くなられています。

少ない機会でしたが、言葉をいただく時もありました。人に対してすごく優しく愛情の深さを感じましたが、一方で仕事には厳しい方で「本当に努力するには勉強しないといけない」という仕事への厳しさは、先輩からも伺いました。

三浦保がすごく好きだった言葉が『愛は愛を生み、信は信を生む』です。愛すれば愛されるし、信頼すれば必ず信頼される、そうすれば裏切られることはないというのが信条でした。また、芸術がすごく好きな方でした。『能』を学び、本社の隣にミウラート・ヴィレッジ(三浦美術館)がありますが、その入口に飾っている陶板焼きなども嗜みました。

これまでに仕事を通して、喜びや困難を感じたことがありましたら、お聞かせください。

これまでの喜びは、家庭用軟水器の事業責任者をしてきた時のことになります。この事業はミウラで唯一のB to Cの事業で、洗濯洗浄、美容健康などに使われている軟水を水道水から作る機器で、現在も販売しています。その責任者の時に、20年目にしてメンテナンス契約を結んでいるお客様が2万件を突破することができたので、区切りのパーティを行いました。今まで携わってきた責任者の方、軟水の効能など研究を後押ししていただいていた大学の先生、既に退職された方、以前その部署にいたメンバーなど、関係した人々が一同に会しました。過去長きに亘ってコツコツ積み上げ、試行錯誤してきた皆さんの熱い話を聞くと、すごく感慨深かったです。2万件に到達したのは、たまたま私が責任者の時でしたが、過去の皆さんの積み上げてきた地道な努力と苦労があつてのことだと感じ、一緒に喜びを感じ合えたのが、印象深い思い出として残っています。

経営資料

しており、お客様にお使いいただいています。

また、燃料電池も製造していますし、その他水素の発生装置など、脱炭素に向けた製品開発を進めていますが、カーボンニュートラル社会の到来をいかにして乗り越えていくのか、「ピンチをどうチャンスに変えるか」が、常に私たちの課題です。

ここからは、鈴木さまの個人的なことも伺わせてください。愛読書や尊敬する人物、座右の銘などがありましたら、お聞かせください。

できるだけ柔軟な考えを持てるように、色々な人の意見や考えを聞くように心がけています。年齢を重ねると頭が固くなるので、自分が正しいと思わず、頭ごなしに違うと考えずに、色んな考えやモノの見方も聞き入れるように柔軟に対応しています。

また、自分の成功体験がずっと成功するわけではないので、その時その時にチャレンジしながら、新しい成功体験を積み重ねられるように考えています。

社内交流やコミュニケーションは盛んなのでしょうか。

割と活発な方だと思います。最初に申し上げたように、弊社は「トータルソリューション」を提案する立場ですので、各事業部の垣根を越えて様々なやり取りや交流を積極的に行っています。また、昔から会社公認の補助付きで月1回の“飲みニケーション”を行っています。

休日や余暇はどのようにお過ごしですか。

仕事のお付き合いでゴルフが多いですね。以前は山登りが好きで、北アルプスや南アルプスに登っていたのですが、ここ数年はコロナ禍で控えていました。今年は再開しようかと計画中です。主に北アルプスと南アルプスに行きます。ただ、富士山は1回も登ったことがありません。私にとって富士山は“見る山”なんです。(笑)

協会へのご意見やご要望があればお願い致します。

科学機器協会に入会させていただき、ありがとうございます。協会の活動に参加しながら各企業の皆さんと交流し、新たなきっかけを作ることができればよいと思います。我々も協力できる分野で積極的に参加していきたいと思いますので、ご支援のほどよろしくお願い致します。

創業当時より度重なる困難はあったかと思いますが、そのたびにピンチをチャンスに変えてきています。1973年の第1次オイルショック、1978年の第2次オイルショックの際も、省エネを打ち出して販売を増加させております。

また、2008年にリーマンショックがあり、翌年はボイラの販売台数は全盛期の7割まで減少しました。しかしそれ以前に、ボイラの水処理の技術を生かしてボイラ以外にも、工場で使用される軟水や脱気水、ろ過装置などの水処理機器や、滅菌装置・食品用の真空冷却機などの分野にも進出しており、全体の売上は大きく落ちこまず軽微なものにとどまりました。

やはりボイラだけの一本足で満足せず、ボイラでお世話になっているお客様に対して多方面に事業を広げていたのが良かったのだと思います。

御社の経営理念などをお聞かせいただけますか。

ミウラの企業理念は「熱・水・環境の分野で環境に優しい社会、きれいで快適な生活の創造に貢献します」です。そして経営指針は「グループの総合力でグローバル化を推進する。テクノサービスで世界のベストパートナー企業を目指す。社員の潜在能力が最大限発揮できる職場作りを目指す」です。

ここに出てくるテクノサービスというのは、創業者の三浦保が掲げた言葉で、「テクノロジー(技術)はサービス(心配り)に乗せて初めて本物になる」という思い、お客様の役に立ちたいという思いであり、それは今の社員にも脈々と受け継がれており、64年の時代を超えてミウラを象徴し続けています。

御社の現在の課題や今後の事業目標をお聞かせください。

社会全体でカーボンニュートラルを目指す中、ボイラは化石燃料を燃やす機械なので、これからの時代は困難が待ち構えていると思います。しかしカーボンニュートラル実現の前に“低炭素”という形が来ますので、できるだけ省エネしていこうというところは、弊社が得意としてきました。現在もお客様に「ミウラは、熱ソムリエ」ということを申していますが、色々な温度帯の熱に対して、最適解化を追求し、より効率的な熱のつくり方をご提案しています。

そうしたことをやっていきながら、一方で脱炭素に向けていく必要があります。水素ボイラなどは2017年から製品化